記録資料 ①

門にしがみつく健太

井上あさ

小学校での離任式の日、健太くんは、別れのあいさつをしている私の目の前で、地面にうずくまり、黙って文字を書いていた。そばにいた担任が、小さな声で、

「そんなことしちゃいかん。話を聞きなさい」

と、肩を叩きながら、やや強い口調で言い聞かせようとする。だが健太くんは、その手を振りはらい、やっぱり書き続けていた。

朝礼台の上から、そんな健太くんの様子が気になり、目をとめたとたん、はっとした。

地面に書かれていた文字は、「いのうえせんせい」であった。私は、急に涙が出そうになる気持ちをぐっと押さえて、あいさつを終えた。

健太くんは、障害児学級の四年生。急性脳症による障害があり、突然暴れたり、人を罵倒したりするかと思えば、急におとなしくなったり、やさしくなったりして、担任を困惑させた子である。その健太くんが私を名前で呼んだのは、出会って、一一ヵ月目のことであった。

健太くんは、ものの名前を、すぐに言葉で表現できないことがあった。そのため、「たまねぎ」が、「ねぎまね」になることもあった。

その健太くんが、私との別れの日、名前と文字を見事に一致させ、自分の力で書いたのである——。

離任式後、障害児学級の子どもたちは、それぞれの教室へ戻っていった。だが、健太くんだけは、門から出て行こうとする私を見つけて、後を追ってきた。そして、その場から立ち去ろうとしない。見るに見かねた担任と教頭が、

「さあ、教室に行こ」

と言い聞かせようとするのだが、その声に耳を傾けようとせず、門にしがみついて、こちらをにらむように、じっと見ていた。

私は、平静さを取り戻そうとしながら、車を走らせて、門を出た…。

——臨時教員にとって、子どもたちとの別れは、いつも後ろ髪を引かれる思いがする。細切れ任用の中での、短期間の教育実践は、系統的、継続的なものには成り得ず、いつもこれからが始まりだ、と思うところで、仕事が終わってしまうからである。

（ああっ、健太にとっても、私にとってもここから始まるのに…）

教師も、教育も細切れであっていいはずはない。（以下略）

②

腕にかかる重さ

私は聾学校の子どもたちと、隣の小学校の運動会に来ていた。交流教育としての徒競走が始まった。あと1組すると茂（聴覚障害・多動、小4）の番だ。だが茂は、私の腕にしがみついて動こうとしない。（重複障害の茂には、やっぱり無理か）

ただ、私には一つの思いがあった。茂は以前、思いつくと教室を、飛び出して行っていた。だが、近頃は、視線も合い、ボールの投げ合いもできるようになってきた。目的的な行動を促す機会として徒競走に参加できたら、と思ったのだった。

私は茂を引きずるようにしてスタート地点に向かう。いつもなら、私が、彼の2、3メートル先で、手招きをするとついて走ってくるのに。

ヨーイドン。腕を引いてみる。思いがけず、茂がついてくる。腕も軽い。私は二人三脚のように、茂の足のテンポに合わせて、ゆっくりと走る。

走りながらふと思う。（それにしても、今日に限って、なぜ、こんなにしがみついてくるのだろう）

そう思ったとたん、ああっ、と声を上げそうになった。茂は緊張しているんだ！

（隣の小学校。風景も観客もちがう……）

ということは、周囲に関係なく飛び出していた茂に、周りが見えるようになったということだ。

小学校の子は10メートル先を駆けていく。だが私は、この瞬間を茂とともにできる喜びで胸がいっぱいだった。「腕にかかる重さは、茂の発達の証」――そんな思いをかみしめるように、二人でゴールに向かった。

③

「じじい、うざい」

迎春

「障害児の放課後実践」の事例検討会。

広子さん（支援学校高一）は、よく人を叩く。親から、卒業後を考え、「厳しくして」と言われた。職員は、人を叩くたびに、〝罰のように〟家に帰していた。

資料一面に「○月○日、誰を叩いた」、などの項目が並ぶ。ふだん柔らかに接している職員が親の言葉に〝直接〟応えようとしている―。中に一行だけ「小さい子には優しい」と書かれていた（隣に保育園がある）。

私は言った。「大事なのは、叩くのをやめさせることではなく、人と関わる力を育てること。『小さい子には優しい』のように、キラッと光る姿を見たいから、皆さんはこの仕事をしているのでしょう。私には指導の〝統一〟ではなく〝画一〟のように思えてならない」。

半年後、私は再び訪れた。広子さんはコースターに絵を描いていた。（上手！）。私が後ろから覗き込む。

彼女は体を動かし、見せまいとする。反対から覗く。逆に動いて隠す。そのうちコースターを抱えて向こうに行ってしまった。活動が終わり、帰り際、広子さんが、私をチラッと見て一言、「じじい、うざい！」。

（おお、でかした！）。職員が受けとめることを大事にし、気持ちを出せるようしてきたことの結果だった。

こんな時代だからこそ、人間についての〝深い〟洞察が求められる―。

２０２０年　元旦

実践記録資料

④ 1/1

問題行動をどうとらえたらいいのか

福井和子

〈はじめに〉

この一年、由美ちゃん（養護学校中一）の起こすいろいろな問題行動に直面するたびに、ため息をつき、指導の方向をつかめないままに対処してきたのが実状です。

〈生育歴と家族状況〉

右片マヒ、てんかん。出産は正常で、一歳の時ひきつけを起こした。就学前は地元の幼稚園に入った。会社員の父と母、妹の四人家族。

〈学習状況〉

学力としては、小一、二程度の力は持っているが、計算問題や漢字の練習などの機械的な学習を好み、応用する力が弱い。

〈学校生活〉

動物や草花が好きで、家で飼っている犬の話をよくする。

〈家でのようす〉

家では留守番が多い。母親は妹のけいこごとの送迎や買い物に出かけるため。犬には食事ごとに会いにいく。

※この後、〈問題行動のようす〉〈今までの対処〉と続きますが、後の「書き換え文」と重なるので省きます。

④ 1-2

由美の眼に涙が…　――「問題児」が心ひらくとき

福井和子

〈物を投げる・人をたたく〉

○月○日　裕一のノートをゴミ箱に捨てる（休み時間）

○月○日　千織の写真をビリビリに破る（休み時間）

○月○日　ビニール製のバットで突然たたく（休み時間）

この一年、由美の起こすいろいろな問題行動に直面するたびにため息をつき、指導の方向をつかめないままに対処してきた。

由美の問題行動には、特徴があった。

「同学年の生徒に」、「教師のいない時」、「自分より弱い子を、限度なくたたく」など、である。

（つづく）

④-2（つづき）

私たちは、「説教をする」、「同じことをして、痛さを味わわせる」などの形で対処してきた。しかし、対症療法でしかなかったようだ。

〈由美のさびしさに共感〉

私は改めて、由美の学校生活のありさまを思い浮かべてみた。

「授業中は、自分から話すことは少なく、休み時間には、大きな声が出る」。けれども、「人と顔をあわすと、〝恥ずかしい〟といって逃げる」など、彼女の「人に働きかけていく力」が、いかに弱いかが見えてきた。

由美は、「仲良くなりたい」と思いつつも、力が不十分で、かかわっていけば問題をおこす……これが、休み時間に「事件」が集中している理由ではないか。

由美は片マヒで、一定に動ける。だから、他の子にも働きかけてはきた。だがそれは、「自分の思い」だけで働きかけてきたようだ。

こうした由美には、後追い的な対処ではなく、「人と人とがかかわっていく」活動を組織していくことが大切だった。

由美は、家では、一人で留守番をしていて、眠ってしまうことが多い、という。学校では友だちとうまくかかわれず、家庭でも犬を相手にしている由美…。私は胸がしめつけられそうだった。

私は前に、由美は動物や花が好きだ、といった。しかし、そうではなかった。由美は、人とうまくかかわれないから、動物や花とかかわっていかざるをえなかった…。

〈本気で怒る正夫〉

体育（ゴロバレー）のとき、由美は、相手チームからのボールを、力まかせにレシーブし、コートの外に出してしまっていた。ニタニタ笑いながら、アウトボールを連発する由美。「由美といっしょのチームにはなりたくない」という生徒たち。由美は次第に孤立していった。

そこで教師が中心になって話し合いをさせた。

「一番目のレシーブはさせないほうがいい」、「やさしくレシーブするよう声をかけよう」。

しかし、一番目のレシーブに突進して、アウトボールは続いた。とうとう、正夫たちが、「僕たちのチームが負けちゃうぞ」と、本気になって怒りはじめた。

そのとき、由美の眼に涙が…。ケンカしても泣いたことのない由美が、〝真剣になって怒った友だちに、涙を浮かべて、素直に、自分をあらわしたのだった。

本物の人間同士のかかわりが、ここから始まる、私はそう感じた。

⑤-1

愛知における養護学校マンモス化解消の取り組み

伊藤隆文

……私たちは、一二月県議会に、「安城養護学校のマンモス化を解消させる」請願署名を提出しました。わずか二ヵ月でしたが、二万一千名を超える署名が集まりました。父母から父母へ、卒業生や地域へと、すごい勢いで広がっていきました。……紹介議員のいない委員会では賛成者ゼロで否決されてしまいました。……

⑤-2

署名用紙の重さは、私たちの思いの重さです

伊藤隆文

私たちは、県議会に、請願署名を提出することにしました。お母さん方から、毎日のように電話がかかってきました。「署名は、印鑑でなくてもいいか。拇印ではだめか」、そんな所からの出発です。わずか二ヵ月の期間に、二万一三六五名の署名が集まりました。署名提出の日、中村さんが、大きな風呂敷包みにぎっしり入った署名用紙をかかえています。小山先生が、「私が持ちましょうか」と声をかけると、中村さんが言います。

「いいえ、重くても全部持って行きます。署名の重さは、みんなの思いの重さですから」。私たちの用意した用紙は一万人分です。ですから、残りの一万人を超える分は父母のみなさんが増刷をして、集めたのでした。なかには、一人で八千人分（！）を集めた人もいました。お母さんがクラスの父母や送迎で出会う人たち二〇～三〇人に渡す。おばあちゃんが通院先や近所の人たちに頼む…。私の職場も、教職員一六七人のうち一五〇人近くの人が賛同の署名をしてくれました。

請願は不採択でした。でも、お母さんが私に声をかけてくれました。「これからだよね」。私は熱いものがあふれてきました。

私の職場の運動は出発したばかりです。けれども、私たちの願いは必ず多数の声になっていく。そして、万博や中部国際空港にお金をかけている愛知で、行政が本来どこに力を入れるべきかを明らかにしてくれるにちがいないと思うのです。

〈追記〉二〇〇五年一月、愛知県教育委員会は、この安城養護学校のマンモス化を解消するため、新しい養護学校を建設すると発表した――私たちの一〇年越しのマンモス校解消の運動が、一つ実を結んだのでした。